

【12】

四国遍路とお接待

1 生徒用資料解説

四国遍路について

四国遍路は、四国各地に伝承の残る、弘法大師空海によせる信仰（大師信仰）を基盤として、大師ゆかりの四国各地の霊場（札所寺院）88箇所を順を追って参詣する巡礼である。一度に88箇所全てを回る「通し打ち」、何回かに分けて回る「区切り打ち」、1番から順に回る「順打ち」、88番から逆に回る「逆打ち」など、様々な遍路の方法が存在する。全行程約1400km、徒歩による通し打ちでは50日程を要するとされる。

徳島県は、四国遍路出発の地であり、「発心の道場」とも言われる。順打ちの場合は、鳴門市大麻町の1番札所霊山寺を皮切りに、阿波市市場町の10番札所切幡寺までは、吉野川北岸の村々や田畑の間をぬって遍路道を進む。吉野川を南に渡り、吉野川市鴨島町の11番札所^{ふじいし}藤井寺から神山町の12番札所焼山寺までは、阿波の遍路道最大の難所「遍路転がし」と呼ばれる山道に行く。焼山寺からは鮎喰川に沿って徳島市に入り、13番札所大日寺から17番札所井戸寺の国府町の平野部の五ヶ寺を参った後は、徳島市街地を抜け、小松島市の第18番札所恩山寺、19番札所立江寺に参る。続く勝浦町の20番札所鶴林寺、阿南市の21番札所太龍寺周辺には、昔ながらの遍路道（国史跡「阿波遍路道」）が残る。その後、遍路道は美波町田井で海岸部にさしかかり、美波町奥河内の23番札所薬王寺を経て、高知県に向かう。また、三好市の66番札所雲辺寺は、愛媛県から香川県に向かう途中にある山岳の札所寺院である。徳島県内を通過する遍路道は約280km、札所寺院は24箇所を数える。

コラム巡礼

巡礼

いくつかの決められた聖地や霊場を順番に参拝して歩くこと。順礼とも書く。世界的にはキリスト教のサンチャゴ・デ・コンポステーラへの巡礼（フランス・スペイン／世界遺産）やイスラム教のメッカへの巡礼（サウジアラビア）等が有名。

日本の代表的な巡礼には以下のものがある。

- 1 紀伊山地の霊場と参詣道（世界遺産）
霊場（吉野・大峰（修験道）・熊野三山（熊野信仰）・高野山（真言密教））の三大霊場参詣道（熊野参詣道・大峯奥駈道・高野山町石道）
平安時代末～鎌倉時代の貴族・武士階級の参詣から、室町時代の民衆参詣時代へ
- 2 西国三十三観音霊場
平安時代（12世紀中頃）成立 日本最古の巡礼
畿内を中心に起こった観音巡礼が広がる
- 3 板東三十三観音霊場
鎌倉時代成立 源頼朝が西国霊場を規範として札所を制定
- 4 秩父三十四観音霊場
室町時代成立 西国・板東・秩父を合わせて「日本百観音巡礼」として発展
- 5 四国遍路
中世末～近世に確立 庶民信仰の社寺巡礼

(1) 四国遍路の歴史

① 古代・中世の四国遍路

四国遍路の起源については、明らかになっていないことが多い。開創1200年も弘仁6(815)年空海42歳の時に四国遍路を開創したという一説に基づくものである。

空海(774~835)が四国を修行の地としたことは、その著書である『三教指帰』(797年)に記されている。これによると18歳で出家した空海が、「阿国大滝嶽」(阿波国太龍寺)、「土州室戸崎」(土佐国室戸岬)で修行をしたことがわかる。そして空海の入定後に、弟子の修行僧らが大師の足跡をたどって遍歴の旅を始めたのが四国遍路のはじまりと考えられている。

平安時代の終わり頃から、四国は辺境の地として、修行僧や山伏など様々な宗教者の修行の場となり、補陀洛渡海信仰や熊野信仰などと混交し、四国遍路の原型が形づくられる。この段階では88箇所の札所寺院などは定まっておらず、四国の山海や様々な靈験所を巡る形であったと考えられる。

中世の文献に登場する四国遍路の原型

『梁塵秘抄』(後白河法皇編 12世紀末)

「我らが修行せし様は、忍辱袈裟をば肩に掛け、又笈を負ひ、衣は何時となく潮垂れて四国の辺地を常に踏む」

『今昔物語』(11世紀末~12世紀前半)

「今昔、仏の道を行ける僧、三人伴なひて、辺地と云は伊予・讃岐・阿波・土佐の海辺の廻也」

『醍醐寺文書』(弘安3(1280))

「修験之習(略)四国辺路、三十三所諸国巡礼、遂其芸」

コラム 補陀洛渡海信仰と熊野信仰

補陀洛渡海信仰とは、南方にある観音菩薩の浄土、補陀洛浄土を目指して室戸岬・足摺岬、那智勝浦などから船を出して渡海しようとする信仰。熊野信仰とは、平安時代に始まる熊野三山の信仰。皇室や貴族をはじめ、武士や庶民階級にまで熊野詣が流行し、その様子は蟻の熊野詣と言われた。

② 近世の四国遍路

修行僧の他に、一般人の遍路が確認できるのは、室町時代末期からのことである。さらに江戸時代に入り、一般人の遍路が増える。江戸時代前期には、空海(弘法大師)ゆかりの88箇所の札所寺院を巡るという現在の形に近い四国遍路が定着する。17世紀後半には、四国遍路の案内書が相次いで出版されていることから、この時期に民衆に深く浸透したと考えられる。

代表的な四国遍路案内書

『四国遍路日記』(澄禅・承応2年(1653))

『四国遍路道指南』(真念・貞亨4年(1687))

『四国遍禮靈場記』(寂本・元禄2年(1689))

江戸時代後期には観光的な要素も加わり、民衆に支えられた巡礼として発展する。江戸時代の遍路の数や出身地について、札所で死亡した遍路の数を分析した田中智彦によると、遍路は宝暦年間（1751～63）から増加、さらに文化・文政年間（1804～29）に大きく増加し、天保年間（1830～43）にピークとなり、明治に向かって減少する。遍路の出身地は四国を中心として、近畿・中国地方が多い。中部から関東地方にかけては少なく、東北・北陸、九州南部では極端に少ない（田中智彦「四国遍路の歴史的変遷」『遍路道』徳島県教育委員会）。下川清の分析によると、徳島県内の道標や遍路墓などの建立のピークは1800年前後（文化・文政期）にあるとされ、該当時期に遍路が増加したことの裏付けとなる。

遍路は修行僧、先祖や縁者の供養のために回る人々だけではない。身体障害者・ハンセン病患者・犯罪者など、当時の社会に受け入れられなかった人々も弘法大師の救い（信仰による病の治癒や贖罪）を求めて回った（終生・遍路は死出の旅）。四国遍路は、あらゆる階層を受け止め、これらを救済するシステムでもあった。

③近現代の四国遍路

明治維新以降、全国的に廃仏毀釈の風潮が広がった。四国では土佐藩や多度津藩で激化しているが、徳島藩では大きな変動はなかったと言われる。ただし、蜂須賀家やその家臣団と関係の深かった寺院は、寺領の喪失、境内地の縮小などの影響を受け、一部には廃寺化するものも見られた。しかし、真言宗や浄土真宗など、一般庶民を檀家とする大多数の寺院では、江戸時代と変わることなく、寺院経営が維持されていた。四国遍路についても「藩政時代からの伝統を受け継ぎ、四国霊場巡拝の風も益々盛んで、一番・五番・十番・二十三番などの札所寺院の門前は隆盛を続けていた。」（『徳島県史』）とされる。このことは、徳島県内の道標の建立年代の第2のピークが1890年前後（明治中期）にあるとする下川清の分析からも首肯されよう。

1930年頃からは、西洋風の服装をしたり、公共交通機関を利用したりして、「合理的に」巡礼を行う「モダン遍路」と呼ばれる遍路も登場している。第2次世界大戦が激化する頃には、遍路の数は激減し、戦後も、しばらくは少なかったとされる。再び四国遍路が多く行われるようになるのは、1950年代半ばからで、昭和29年（1954）には、四国鉄道局が四国遍路に関する書籍『観光と宗教の旅の道標』を近畿地方を対象に配布している（森正人「戦後から1980年代までにみる四国88か所巡礼の動態：マスメディア、観光とのかかわりから」三重大学学術機関リポジトリ研究教育成果コレクション）。

高度経済成長期以降、モータリゼーションの発達に伴い、自動車を使った遍路が一般的となり、四国遍路も大きく変容したと言われる。現在、主流を占める観光バスによる団体の遍路は昭和28年（1953）に愛媛県の伊予鉄バスが企画した四国八十八箇所巡拝バスが嚆矢とされる。また定年退職を機に自家用車で巡拝する個人や夫婦なども多い。遍路の数は、年間10万人程度と言われる。そのうち歩き遍路は3000人程度とされるが、近年は、増加の傾向にあると言われる。また、外国人の歩き遍路が増加していることも近年の特徴とされる。遍路の動機としては、信仰のため、先祖や縁者の供養のためなど伝統的なものに加え、観光や癒やし、悩みの解消・自分への挑戦など多様化している。

コラム 歩き遍路の日数

- 澄禅『四国遍路日記』承応2年（1653）＝91日間
（奥の院に詣でたり，寺に逗留の日数が多い）
- 土佐国朝倉村の兼太郎 文化2年（1805）＝32日間
（経費の節約が目的で「走り遍路」とも言われる）
- 新井頼助『四国巡拝日記』文政2年（1819）＝57日間（名所・旧跡巡りの色彩が強い）
- 中務茂兵衛 明治時代 22歳～78歳で亡くなる57年間に280回の遍路
（→1回50日程度の計算）
- クレイグ・マクマラン 平成7年（1995）＝30日
（ニュージーランドのトレッキングガイド）
- 西川阿羅漢『歩く四国遍路・・・』平成9年（1997）＝31日間
（健康のため，歩くことが目的の遍路）
[佐藤光久『遍路と巡礼の民俗』人文書院2006より]

（2）遍路道の石造物

①道標（どうひょう・みちしるべ）・丁石（ちょうせき・ちょういし）

「道標」は，遍路道の分岐点などに建てられた札所寺院への道しるべ，「丁石」は札所寺院への距離を示したもの。一町（約109m）毎に札所までカウントダウン形式で設置される。

道標は主として遍路が願主（建立の発起人）となり，施主から寄付を集めて，遍路の便宜のために造立したものが多い。現代も路傍には，遍路による吊り札道標・シール道標などが見られ，その精神が受け継がれている。丁石は村単位が講で設置する場合が多い。

代表的な道標建立者と道標

真念

真念は1687年に『四国遍路道指南』を出版し，四国遍路の祖と呼ばれる僧侶。碑面に「右へんろみち願主真念」等と刻む。200基あまりの道標を建てたとされており，現在は37基ほどが確認されている。

武田徳右衛門

伊予の人で1800年前後に道標を建立。碑面には，上部に弘法大師像が刻まれ，その下に何寺まで何里と次の札所への距離が明記されているのが特徴。現在130基ほどが確認されている。

照蓮

阿波の人で武田徳右衛門に続き，1809年頃から道標の建立を始める。碑面は，上部に遍路道を示す手印（指さし）があり，その下に弘法大師像，更にその下に「四國中千躰大師」と刻み，道標千基を建立するとの意思が示される。現在72基が確認されており，

内62基は、阿波国内に建てられている。

中務茂兵衛

明治時代、山口県の人。22歳から遍路を始め、78歳で亡くなる57年間一度も故郷に帰ること無く遍路を続け、279回の遍路を達成し、280回目の途中で亡くなった。88度目の遍路から、各地に道標を建て始めた。現在、240基余の道標が確認されている。同時代の僧侶からは「至る處（ところ）に道しるべを建てつゝあるく人で、四國ではこの人を知らぬ人はない程の篤信者なり」と評された。碑面には手印と札所名、中務茂兵衛の名前、遍路の回数、施主の住所氏名等が刻まれる。

丁石

角柱形丁石

鶴林寺道やかも道の角柱形丁石は、花崗岩製で南北朝時代の丁石を近世に転用したものの。焼山寺道では、砂岩製のものが見られる。

舟形丁石

舟形で中央に地蔵を浮き彫りにしている。徳島県内ではこちらが主流。

② 遍路墓（へんろばか）

遍路の途中で行き倒れ、亡くなった人を村で弔い、遍路道沿いに墓を建てる習慣があった。「遍路墓」といい、碑面には、戒名・没年月日・生国郡村・俗名などが刻まれる。病気の遍路は村で介護し、子連れの遍路で親が亡くなった場合、子は「宿継村継」で世話をしながら出身村に送り届けられた。

徳島藩では、遍路に対し、生国の庄屋や寺院が発行した「往来手形」の所持を義務づけており、国境の番所で厳しく改められた。また、上方から鳴門の岡崎港に上陸する遍路には「渡海切手」の所持が義務づけられていた。これら証明を持つ遍路に対しては四国遍路が保証され、遍路の宿泊や病気の治療、食事などの世話、死亡時の取り扱いなどが村に命じられていた。逆に往来手形を持たない遍路は「乞食体（こつじきてい）」と呼ばれ、死後の扱いは異なった。

（3）お接待

① お接待

四国遍路の特徴として「お接待」がある。遍路が通過する村々の住民が遍路に対し、米やお茶、お菓子、金銭を与えたり、食事や宿を提供するなどの施しを行ったものである。これは、善行を積む功德であり、遍路とともに四国を巡っている弘法大師（「同行二人」）への接待と考えられた。接待をすると四国遍路をしたのと同じ功德が得られるとされた。接待は、地域住民が遍路を支える役割を果たし、貧しい遍路や女性遍路など経済的弱者の保護に繋がった。

また、接待は地域住民だけでなく、他国の団体によっても行われた。中でも毎年春に靈山寺や薬王寺で蜜柑等を配った和歌山の「紀州接待講」や「有田接待講」、立江寺で活動した大阪の「泉州信達組」が有名である。

接待は、西国巡礼や板東巡礼にも見られたが、西国巡礼は近世以降、板東巡礼は近代以降に衰退した（佐藤光久『遍路と巡礼の民俗』）。四国遍路においても、バス遍路や車遍路の増加により、一時減少傾向にあったが、近年の遍路ブームや歩き遍路の復活により、再び活発になりつつある。伝統的な個人接待や接待講のほか、地域の老人会や婦人会、ボランティアグループによる接待、学校教育の一環としての生徒などによる接待、まちづくりグループによる地域活性化を目指した接待など、その形態や目的も多様化している。

「四国遍路に残る接待は、遍路する人々に感動を与え、感謝の念を植え付ける。現代の日本社会は経済的に豊かになった反面、人と人との交流が乏しくなった。見ず知らずの人からの接待に感激し、改めて人の心の温かさを認識し、それが心に深く刻まれる。そこには接待を施す側の功德としての信仰心と苦勞して歩く遍路との間に心の通いがある。」
（佐藤久光『遍路と巡礼の民俗』）

②^{ぜんこんやど}善根宿 他， 宿泊施設

旅籠は、食事、寝具が提供される宿泊施設で、通常、一般の旅人が利用するものであった。遍路は接待としての善根宿や遍路屋・木賃宿・通夜堂などを使用した。これらは、昭和40年頃から宿坊や民宿・旅館の増加に伴い衰退した。

善根宿

接待の一環として、自宅を宿として遍路に提供する行為。宿を貸そうとする者は最寄りの札所に行って宿を乞う遍路を自宅に連れ帰る。返礼として遍路はその家の仏壇で読経し、先祖を供養した後、食事の提供を受け、家族たちと他国の会話に興じた。

遍路屋

江戸時代の真念の建設に始まる宿泊所。無住の庵や観音堂、地藏堂、大師堂が利用された。

木賃宿

遍路宿 米を持ち込み燃料代（木賃）を支払う宿。おかずは無料（汁・菜など）寝具は不十分で衛生上も問題があったとされる。

通夜堂（つやどう）

札所寺院が修行僧、経済弱者・病弱者の遍路等のために建設、提供した無料宿泊所。

駅路寺（えきろじ）

慶長3年（11598）蜂須賀家政により制度化された、藩による遍路の支援と旅人の監視を目的とした施策。阿波国内の主要街道沿いに配置され、鳴門市長谷寺・上板町瑞雲寺（6番安楽寺）・吉野川市福生寺・東みよし町長善寺・三好市青色寺・阿南市梅谷寺・美波町打越寺・海陽町円頓寺の8ヶ寺がある。

③ 遍路が四国に伝えた文化

接待や善根宿は、地域住民と遍路の交流を生み、各地に遍路たちがもたらした技術や様々な知恵を定着させ、地域の産業や文化の発展に大きな役割を果たした。

遍路による交流がもたらした文化として、代表的なものに次のようなものがある。

- ・大谷焼 豊後（大分県）の遍路，文右衛門（万七）が製法を伝授
- ・和三盆糖 化政期に日向（宮崎県）の遍路が情報を伝え，丸山徳弥により成功
- ・におい米（高知） 窪川町仁井田から九州・中国地方へ伝わる
- ・大洲和紙（愛媛） 福井の六部が越前和紙の技術を伝える
- ・藍染（愛媛） 天保5年八幡浜の谷口文六が阿波より葉藍の種を持ち帰る
- ・和三盆糖（香川） 薩摩国奄美の遍路，関良介が種子キビと製法を伝える

（４）四国遍路を世界遺産に

① 世界遺産

世界遺産条約に基づき世界遺産リストに登録された、遺跡・景観・自然など人類が共有すべき「顕著な普遍的価値」を有する遺産

○世界遺産条約（世界の文化遺産及び自然資産の保護に関する条約）

1972年 ユネスコ総会で採択

2016年7月現在の世界遺産

世界の登録件数＝1052件（自然遺産203・文化遺産814・複合遺産35）

日本の登録件数＝ 20件（自然遺産4件・文化遺産16件）

② 世界遺産登録に向けた四国4県の取り組み

平成18年 4県共同提案で暫定リスト入りを目指す→暫定リスト記載ならず

平成19年 4県と58市町村で共同再提案→暫定リスト記載ならず・課題が明確化

課題① 史跡など，文化財として保護された札所寺院や遍路道を増やすこと

課題② 四国遍路の世界史的・国際的な重要性の証明をすること

平成21年以降 札所寺院と遍路道の文化財調査と指定を開始

「四国八十八箇所と遍路道」世界遺産登録推進協議会の設置

平成22年 「阿波遍路道 鶴林寺道・太龍寺道」の約4.5kmが史跡指定（四国初）

平成28年度現在 阿波遍路道約11.4kmが史跡指定

平成28年8月8日，四国4県と関係58市町村が，暫定一覧表記載に向けて，再度「提案書」を文化庁に提出している。

コラム 史跡とは

貝塚・古墳・都城跡・城跡・旧宅その他の遺跡で，わが国にとって歴史上または学術上価値が高いものについて，国および地方公共団体が史跡として指定をすることで法律上の保護措置を行ったもの。文化財保護法に基づく国史跡，県条例に基づく県史跡，市町村条例に基づく市町村史跡がある

参考文献

四国遍路について

- 『巡礼の社会学』前田卓 ミネルヴァ書房 1971
『旅の中の宗教—巡礼の民俗誌』真野俊和 NHKブックス 1980
『四国遍路記集』伊予史談会 1981
『四国遍路の宗教学的的研究 その構造と近現代の展開』 星野英紀 法蔵館 2001
『四国遍路』辰濃和男 岩波書店 2001
『遍路と巡礼の社会学』佐藤光久 人文書院 2004
『遍路と巡礼の民俗』佐藤光久 人文書院 2006
『四国遍路と世界の巡礼』四国遍路と世界の巡礼研究会編 法蔵館 2007
『四国八十八ヵ所』石川文洋 岩波書店 2008
『巡礼の文化人類学的研究 四国遍路の接待文化』 浅川泰宏 古今書院 2008
『遍路文化を活かした地域人間力の育成 報告書』鳴門教育大学 2010
『四国遍路と山岳信仰』四国地域史研究会連絡協議会編 2014
『図説 徳島県の歴史』河出書房新社 1994
『徳島県の歴史』山川出版社 2007
『遍路道』徳島県教育委員会 2001
『阿波遍路道 鶴林寺道・太龍寺道・いわや道』徳島県教育委員会 2010
『阿波遍路道 いわや道・かも道』徳島県教育委員会2011
『阿波遍路道 恩山寺道・立江寺道』徳島県教育委員会2012
『舎心山常住院 太龍寺』徳島県教育委員会2013
『霊鷲山宝珠院 鶴林寺』徳島県教育委員会2014
『母養山宝樹院 恩山寺』徳島県教育委員会2015
『黒巖山遍照院 大日寺』徳島県教育委員会2016
『阿波遍路道 焼山寺道・一宮道』徳島県教育委員会2016

DVD

- 『ロード88—出会い路，四国へ』村川絵梨・長谷川初範 他 2005
『ウォーカーズ—迷子の大人たちへ』江口洋介・戸田菜穂 他 2007

2 ねらい

◎我が国を代表する文化遺産である「四国遍路」について学ぶことを通じ、四国及び本県の歴史や風土について、理解と愛着を深める。

◎「お接待」が四国に根付いた伝統であることを理解し、訪問者に対するおもてなしの心情や態度を養う。

3 教材選定の理由

四国遍路は、88箇所の札所寺院と1,400kmに及ぶ遍路道からなる、壮大な巡礼行為であり、一般民衆や四国の地域社会が長年にわたり支え続けてきた、他に例を見ない文化遺産である。現在、四国4県は「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産登録に向けた取り組みを続けており、四国遍路を通じて四国が一つになろうとしている。

四国遍路について学ぶことが、郷土に対する理解と愛着を高め、四国を訪れる訪問者に対する、おもてなしの心情と態度を養うことに資すると考え、本教材を選定した。

4 学習の流れ（例）

	学習活動	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・ 四国遍路について知っていることを自由に発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 知識だけでなく，自分や家族の経験などがあれば，感想も発表させる。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・ 四国遍路の歴史を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシート 1 ・ 真言宗の開祖である空海が関係していることを理解させる。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遍路道に残る石造物や史跡「阿波遍路道」について知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシート 2 ・ 石造物や遍路道は，四国遍路の歴史を物語る貴重な文化財であることを理解させる。 ・ 遍路道が校区を通過している場合は，実物の写真等を見せる。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ お遍路さんを支えたお接待を知り，お接待を受けた時の心情について話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 見ず知らずの人から受けた親切や喜ばれて感じる，うれしい気持ちを想像させる。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 四国遍路の世界遺産登録に向けた取り組みについて知る。 ・ 四国遍路を未来に伝えるためにどんなことをすればよいか考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシート 3 ・ お遍路さんや訪問者への接し方など自分たちにできることを考えさせる。
結論	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時のまとめをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシートの自己評価を行わせる。